追手門学院大学文学部紀要　27号　1993年5月31日

会話における繰り返し表現

――その形式と機能――

稲　木　昭　子

Functions of Repetition in Conversation

Akiko　Inaki

0．はじめに

従来言語行為の「繰り返し」(repetition) はさけられるべきものとして，否定的に見なされてきた。繰り返しは単に文の冗長度を上げるに過ぎないものであり，およそ非創造的なものであるというわけである。しかし，成句や挨拶ことば，基本的な構文，パターンとしての固定度の高い言語形式の使用等，いわゆる広義の繰り返しはいうまでもなく，日常の普通の話しことばであれ，書きことばであれ，それがすぐ前のことばを繰り返したものであったり，以前のことばを繰り返したものであることは普通にみられる。言語行為にとって繰り返しはまさに基本的なものであり，おそらく，およそ全てのことばが潜在的に繰り返しであるといっても過言ではないであろう。

もちろん私達の日常の会話のなかにも，この繰り返しはひんぱんにでてくる。これらを単に無駄なもの，冗長度を高めるものというだけで片付けるには，性急すぎるように思われる。ここでは会話における繰り返し表現が，どの様な機能や効果をもつのかを考察してみたい。例としてあげる会話は，繰り返されるものと繰り返したものが確認できるような場合に限ることにする。

ある会話において既になされた発話を繰り返す時，自分のことばを繰り返す場合と，人の言ったことばを繰り返す場合の二種類考えられる。繰り返された発話のその元を，発話のmodelということで，Mと置き換える。[1] そしてこのMを繰り返したものをM′とする。そうな

1．Chafe (1970) がエコー発話をとりあげた時に，modelという用語を使用。この用語を借用して，元発話をさすことにする。

るとM′は一言一句違えずにMが再現されることもあるし，Mの意味は保持しながら，多少の言い換えをすることもある，あるいはMの一部を利用してこれに情報を加算することも考えられる。さらに形式的には，Mを単に繰り返す場合や，Mに疑問符や感嘆符を後続させることもある。後者はいわゆるエコー発話と呼ばれるものである。さらに極性一致の付加部が後続することもある。これらの疑問符，感嘆符，付加部の後続は，これら自体ですでになんらかの発話の意図があることが表明されているわけであるから，何も付けない場合とは当然異なった取扱いが必要であろう。

以上の場合を簡単に次のように分類して，繰り返しがどのような機能，効果をはたしているかを例文にあたってみることにする。

1．無付加型：発話者が，MをM′と繰り返して何もつけない場合
2．エコー疑問文：発話者が，繰り返したものに疑問符をつける場合
3．エコー感嘆文：発話者が，繰り返したものに感嘆符をつける場合
4．極性一致の付加疑問文：発話者が，繰り返したものに極性一致の付加疑問をつける場合

1．無　付　加　型

ここでは先ず，M′に疑問符，感嘆符，付加疑問も後続しない例をみてみることにする。相手のMを繰り返すことで，基本的にはMを受信したことを表明する機能をもつ。そしてMへのかかわり合いの程度に応じて，例えばMの内容に興味が少ない場合には，少なくとも無視はしていないということで，単に会話に参加しているという意志表示，あるいは相手の話を聞いているといった消極的な機能をもつ。いわば一種の共感づくりの役目を担う。またMに興味がある場合には，M情報を大切に扱っていることを示唆し，さらにMを承認，肯定したり，納得したことを相手に伝える働きをする。

合いの手的な繰り返しには，新たな情報追加の機能はないが，積極的に会話に参加していることを示唆し，気分を盛り上げ，話をはずませるといった機能を持つ。一方，Mを利用して話を展開，拡大していく場合，繰り返しは会話のテーマの一貫性を維持するのに役立つ。疑問文の場合には，時間かせぎで一種の答えじらしになることが多い。

発話者本人が自分の発話を繰り返す場合，意識的にしろ，無意識的にしろ，自分の大切な意味内容はMであると意志表示をすることになる。従って強調，念押しの働きがでてくる。またMに焦点をあてて反すうすることより，不本意ではあるが強いて自分に納得させるためということも考えられる。納得できない場合には，続くことばで，Mに対する懐疑が示されることもある。

いくつか例文にあたってみることにする。元発話のMは波線，繰り返されるM′は実線で示すことにする。

（1）　Norman : Well, $_1$look at you.
Ethel : Yeah, look at me. Quite a sight, aren't I?
Ethel : Oh, Norman, it's so beautiful. Everything's just waking up. $_2$Little tiny birds, little tiny leaves. I saw a patch of little tiny flowers over by the old cellar hole. Uh, I forget what they're called, little tiny yellow things. Well, do you want to help me with the covers ?
Norman : I don't have anything else to do.
Ethel : Come on.
Norman : $_3$What were you doing out in the woods ?
Ethel : Norman, what do you think I was doing ? I was getting wood. Hey, I met the nicest $_4$couple.
Norman : What? Where ?
Ethel : In the woods.
Norman : A couple of people ?
Ethel : No. A couple of antelope. Of course a couple of people. The name is Migliore, I believe.
Norman : Migliore ? What sort of name is that ?
Ethel : I don't know, darling. Italian, I suppose. They're up from Boston.
Norman : $_5$They speak English ?
Ethel : Well of course they speak English. They're a nice $_6$middle-aged couple, just like us.
Norman : If they're just like us, they're not middle aged. Ha !
Ethel : Of course they are !
Norman : Middle age means the middle, Ethel, the middle of life. People don't live to be a hundred and fifty.
Ethel : Well, we're at the far edge of middle age, that's all.
Norman : We're not, you know. We're not middle-aged. You're old, and I'm ancient.
(OGP)

人生の黄昏時を迎えようとしている老夫婦が夏を過ごすためにやってきたコテッジでの日常の何気ない会話である。森に薪をとりに行って帰ってきたEthelに夫のNormanは，$_1$look at you.と会話の皮切りをする。You look very nice.ぐらいの意味であろうか。しかしここでは文字通りの意味ではなく，Ethelの恰好があまり見場のよくないことをからかって発話されたものである。このNormanのからかいを受けて，このMを利用して，代名詞youをmeに変換して相手にもどす。この種の合の手的な繰り返しは，相手の言うことに同意のあいづちをうちつつ，話の気分を盛り上げる。

Ethel の自分の発話内での $_2$little tiny の繰り返しは，無意識的あるいは意識的にしろ強調としての機能を持つ。

繰り返しが，stalling つまり時間稼ぎのために使われることはよくあるが，特に疑問文を繰り返す時にはよくおきる。この例では，Norman の $_3$What were you doing out in the woods？ を，Ethel がわざわざ Norman と呼びかけて繰り返し，一種の答えじらしをする。そして答えをじらすことによって，相手の関心を自分の答えに引きつける。この場合「薪を集めていた」の次にくる「素晴らしいカップルに出会った」ということに焦点をあてる気持ちが反映される。

Norman の $_4$A couple of people？ の質問にたいする yes の返事のかわりに，Of course a couple of people と繰り返す。しかしここでは先ず M を利用して，No. A couple of antelope と，Norman の気を軽くいなして，そのあとすぐ本題に入り，M′ と繰り返す。

Norman の $_5$They speak English？ を，Ethel は Yes の代わりにそのまま繰り返し，相手の質問を肯定する。

$_6$middle-aged, middle age といったキーワード的な語を繰り返すことによって，二人の間の middle age 観を調整する。代名詞で置き換えることなく繰り返されることにより，このことばの意味を発話者が如何に大切に考えているかを表わす。と同時にキーワードを繰り返すことは発話間の一貫性を保持するのに役立つ。

（2） Ethel : Oh, no! Poor Elmer! He's had a terrible fall. Poor little Elmer. The life you've led! $_1$He was my first true love, you know.
Norman : I've known all along I wasn't the first in line.
Ethel : Ha, no, you were a rather cheap substitute for Elmer. And now he's had a fall, poor dear.
Norman : $_2$Maybe he wanted to kill himself. Maybe he wanted to be cremated. Probably got cancer or termites for something. (OGP)

Ethel は小さい頃から大切にしていた人形の Elmer を暖炉の灰の中に見つけて叫ぶ。$_1$you know はこの場合，会話におけるつなぎ語（link word）の役目を担っており，普通は，いちいちこれに反応することはしない。ところが Norman はこれを文字どおりの意味に捉え，これを利用して，M′ にかぶせることにより情報を加算していく。しかもこの場合 M′ は M を巧妙に言い換えたものである。つまり Ethel は（He—first）と言っただけにもかかわらず，Norman は（I—not first）と first を否定することで，一見すると相手のことばを認めていることになるが，その実巧妙にも自分を second の位置に固定してしまう。

相手のことばをとりこんで発話していくことで，より会話の中に共感を広める。

Mの一部を繰り返して，新しい文を作成するやりかたは，文のスムーズな流れの確保に役立つ，と同時に，これは聞き手にとって理解，把握が容易になるといったメリットがある。Normanの$_2$最後の発話では，感情の高まりが同じ文型をとらせる。Normanは80才の誕生日を迎え，寂しさと死への恐怖にさいなまれ，どう自分を対処していいのかわからぬ状態にいる。人形に自分をだぶらせて，いらだちの感情をぶつけている場面である。

（3）　Viney : Let Mr. Jimmy go by hisself, you been pokin' that garden all day, you ought to rest your feet.
Kate : I can't wait to see her, Viney.
Viney : Maybe she ain't gone be on this train neither.
Kate : Maybe she is.
Viney : And maybe she ain't.
Kate : And maybe she is. Where's Helen ?　(TMW)

遠くからやって来る，娘のHelenの家庭教師（Annie Sullivan）を駅まで迎えに行くと言い張るKateを，下働きのVineyがとめている場面である。相手のことばをとりこんで，しかも肯否を逆にして，相手に返すわけであるから，かなり強いインパクトを相手に伝えることになる。しかもここでは，このいわばことばのキャッチボールを積極的に楽しんでいる風情である。

（4）　Kate : What will you try to teach her first ?
Annie : First, last, and —in between, language.
Kate : Language.
Annie : Language is to the mind more than light is to the eye. Dr. Howe said that.
Kate : Language.　(TMW)

家庭教師のAnnieはKateに，Helenに教えることは言語のみであると言う。Annieのlanguageを受けて，KateがLanguageと繰り返す。相手の情報を受信したことを示すとともに，了解したことを示す。Annieがあえて代名詞を使用せず，意識的に反すうすることにより，この情報内容の重要性を示す。さらにKateがこれを繰り返し，与えられた情報を大切に扱っていることを示すと同時に，困難に立ち向かおうとするAnnieの気持ちを考え自分に納得させる。

（5）　Keller : It's a homecoming party, Miss Annie.
Annie : She's testing you. You realize ?

James[TO Annie] : She's testing you. (TMW)

二週間かけての Annie の訓練もむなしく，Helen は以前と全く同じ行動をとる。それを許そうとする父親の Keller に向かって Annie は，She's testing you（ヘレンはあなたを試しているのですよ）と，彼の甘やかしをなじる。ところがこの発言をそっくりそのまま息子の James が Annie に返す。（今あなたは父に，「ヘレンはあなたを試しているのですよ」と言ったが，それもいうなら「自分こそ試されているのだ」というべきでしょう）と。Annie には，自分の発言がそのまま繰り返され自分にかえってくることはかなり強い刺激効果をもたらす。この場合，さらにその代名詞が自分自身をさすという二重のインパクトを持つ。まさに自分が放った矢を自分が受けるという痛手を負う。Annie に再考をうながすこの発言は効果満点である。

（6） Eliza : $_1$What's to become of me ? What's to become of me ?
Higgins : How the devil do I know what's to become of you ? What does it matter what becomes of you ?
Eliza : $_2$You don't care. I know you don't care. You wouldn't care if I was dead. I'm nothing to you—not so much as $_3$them slippers.
Higgins : Those slippers.
Eliza : *Those* slippers. I didn't think it made any difference now. (MFL)

Eliza の感情のたかまりは，$_1$自分の発話の繰り返しを生む。Higgins がさらにこれを二回繰り返すことにより，感情のいらだちを募らせる。この種の繰り返しは次の，Eliza 発話の中にもあらわれる。$_2$You don't care.が二回パラフレーズされて，繰り返される。次に Eliza の $_3$them slippers が，Higgins によって冷静に those slippers とことば修正される。つまりこの場合の正しいことば使いは them ではなく those であると。このことば修正を受けて，Eliza はこれを繰り返すことによりさきほどの自分のことばを修正する。しかしこのことば修正によって，Eliza の行く末という大事な話が，正しいことば使いという今や Eliza にとってはどうでもいい話にそらされてしまう。この them slippers, Those slippers, *Those* slippers の一連の繰り返しは例えば学校の授業のなかで正しいことば使いを教える際に教師と生徒の間にみられるものである。

2. エコー疑問文

Quirk et al. (1985, pp 835 - 38) では，エコー発話 (echo utterances) を次のように定義する。'Echo utterances are utterances which repeat as a whole or in part what has been said

by another speaker. They may take the form of any utterance or partial utterance in the language, but in their discourse function they are either questions or exclamations. Echo questions are either recapitulatory or explicatory.' エコー発話のうち，ここでは recapitulatory echo questions（反復的エコー疑問文）の yes–no 型と，echo exclamations（エコー感嘆文）が問題になる。

yes–no 型のエコー疑問文では，基本的機能としては，M の一部または全体が，相手の発話内容の確認のため繰り返され，文尾に疑問符がつく。M の確認を明示的にするため，'Did you say. . .?' あるいは '. . . , (did) you say?' が付加されることもある。つまり「M といったか?」と聞くわけである。応答は基本的には，yes, no によって行なわれ，その後に，問い返しに確認を与える文が続くことになる。が，実際にはそれほど単純なことではない。というのも，この疑問文は単なる相手の発話内容の確認作業のために使われることは少なく，むしろ発話内容を受信したうえで，内容に懐疑を示したり，そのことばそのものを問題にすることが多い。極端な場合，M を否定してほしいというところまで示唆することもある。応答は通常発話者の発話の意図を考慮に入れて行なわれる。例えばことばとがめを受けて，先ほど述べた自分のことばを修正したりもする。

自分の M を，M′？ と繰り返す場合，M′ について相手に確認することはないが，自分自身のことばに対する懐疑を示すことは考えられうる。

エコー疑問文の例を二つあげる。

（7）　Kate : What happened ?
Annie : She ate from her own plate. She ate with a spoon. Herself. And she folded her napkin.
Kate : Folded—her napkin ?
Annie : The room's a wreck, but her napkin is folded. I'll be in my room, Mrs. Keller.
Viney : Don't be long, Miss Annie. Dinner be ready right away !
Kate : Folded her napkin. My Helen— folded her napkin.　(TMW)

Kate は，わが子（she）がナプキンをたためるようになれたとはとても信じられない。Annie のことばを繰り返すことによって，そのことばを確認する。「本当に M とおっしゃたの?」この例では続いて無付加型の繰り返しが後続する。相手のことばに yes の返事をするかわりに，Annie が自分の発話を再度繰り返し，M の重要性に固執する。Kate はさらにこれを二度繰り返し，感情の高まりを示す。また，相手の情報を尊重する態度を表明することにもなる。

(8) Keller: $_1$I have not yet consented to Percy! Or to the house or to the proposal! Or to Miss Sullivan's—staying on when I—. Very well, I consent to everything! For $_2$two weeks. I'll give you two weeks in this place, and it will be a miracle if you get the child to tolerate you.
Kate: Two weeks? Miss Annie, can you accomplish anything in two weeks?
Keller: Anything or not, two weeks, then the child comes back to us. Make up your mind, Miss Sullivan, yes or no?
Annie: Two weeks. For only one miracle? (TMW)

Keller の $_1$前半の発話では，発話のいきおいが，to N の繰り返しを生む。そして最後に I consent to everything. と逆の方向で落ちつく。そしてここで，$_2$two weeks という一つの条件をつける。この「二週間」というキーワードがこれから繰り返される。Keller は自分の発話の中でこれを繰り返すことにより，強調をおこなう。Kate はこれをエコー疑問文で，ことば確認をする。Kate の確認に応答して，yes の返事の代わりに，Keller はこれを繰り返すことで，強調または確認する。Annie はこれをさらに繰り返し，情報受信を伝え，自分の了解を示す。この場合，この条件がいかに重要であるかを自分に言い聞かせるために，代名詞で置き換えることなく繰り返される。

3. エコー感嘆文

M あるいは M の一部を繰り返し，これに感嘆符を付加することは，使用された語句等への話し手の感情を，形式的に明示化することになる。

(9) 'Sure, it's an arm, yer honour!' (He pronounced it 'arrum')
'An arm, you goose! Who ever saw one that size? Why, it fills the whole window!' (AAI)

(10) 'We won't talk about her any more, if you'd rather not.'
'We, indeed! cried the Mouse, who was trembling down to the end of its tail. 'As if *I* would talk on such a subject! Our family always hated cats: nasty, low, vulgar things! Don't let me hear the name again!' (AAI)

(11) 'Oh, I beg your pardon!' cried Alice hastily, afraid that she had hurt the poor animal's feelings. 'I quite forgot you didn't like cats.'
'Not like cats!' cried the Mouse, in a shrill, passionate voice. 'Would you like cats, if you were me?' (AAI)

上記三例文とも，「M だなんて，とんでもない」と，この M への感情を表現する。相手のことばを利用しているだけに，相手に対する表現効果は強い。話し手の感情表現を補強するために，M の後ろに indeed, you goose 等の語が付加される。さらに続く文の中で，その感情の特定化が行われる（例文の点線部分）。

このエコー感嘆文は，対話相手のことばに対する自分の感情を伝えるわけであるから，相手の対応を期待する気持ちは弱い。しかしわざわざ相手のことばを問題にするという点から考えれば，「M だなんて，とんでもない」と，この M を否定する感情が強く反映されることになる。次例はこの M の否定の気持ちにさらに，M の一部の意味を巧みにすりかえて，ことば遊びをする例である。

(12)　'No, please go on!' Alice said very humbly. 'I won't interrupt you again. I dare say there may be *one*.'
'One, indeed!' said the Dormouse indignantly. However, he consented to go on.
(AAI)

この場合の one は treacle-well（水あめの井戸）を指す代名詞である。Alice は，「そんなのもあるかもしれない」と，Dormouse に譲歩する。これを受けて Dormouse は，この one を数詞の一つととって，「そんなのも一つはあるかもしれないなんて，全く失礼だ。」とふくれる。つまりここでは，M の意味をすりかえて，「M だなんて，とんでもない」ということになる。

4．Cp 付加疑問文

付加疑問文には，付加部（tag）と付加部が対応する先行節との肯定・否定の極性が一致する場合（Cp: Constant Polarity）と，一致しない場合（Rp: Reversed polarity）がある。相手の発話の繰り返しの場合には Cp 付加部が後続する。

(13)　Doolittle: Now wait a minute, Governor, wait a minute. You and me is men of the world, ain't we?
Higgins: Oh! Men of the world, are we? You'd better go, Mrs Pearce.
(MFL)

前半の付加疑問文では，Doolittle が自分の考え（You and me is men of the world）をこの時点で初めて会話の場に導入し，これに Rp 付加部をつけ，自分の発話内容に Higgins も賛成してくれる様同意を求める。これに対して Higgins は，すでに既知情報になった Doolittle の

Mを反復し，これにCp付加部をつけ，「'men of the world' といったか」を経て，「'(We are) men of the world' とはこれは恐れいった」と，men of the worldの範疇の中に自分もDoolittle並に入れられたことに対する驚きを表明する。つまり，相手のことばを取りあげ，Cp付加疑問文で「これこれということですって（とんでもない）」を表明する。

(14) "I think there is something you haven't told me," said Chief Inspector Davy.

Bridget grasped thankfully at a straw. "Oh, I forgot, " she said. Yes. I mean she did go to some lawyers. Lawyers who were trustees, to find out something."

"Oh, she went to some lawyers who were her trustees. I don't suppose you know their name ? "

"Their name was Egerton—Forbes, Egerton and Something," said Bridget. "Lots of names. I think that's more or less right."

"I see. And she wanted to find out something, did she ? "

"She wanted to know how much money she'd got," said Bridget.

Inspector Davy's eyebrows rose. "Indeed ! " he said. "Interesting. Why didn't she know herself ? "

"Oh, because people never told her anything about money," said Bridget. "They seem to think it's bad for you to know actually how much money you have."

"And she wanted to know badly, did she ? "

"Yes," said Bridget . . . (ABH)

Davyは，対話相手Bridgetの友人Elviraに関する情報を，相手のことばを利用しながら，「これこれということですね」と，巧みに一つづつ確認していく。この相手のことば反復の際にCp付加疑問文及び無付加型が活用される。BridgetとDavyの対話を簡単にまとめてみる。

B： M_1（. . . she did go to some lawyers. Lawyers who were trustees, . . .）
　$+M_2$（. . . to find out something.）
D： Oh, M_1.
D： M_2, Cp tag ?
D： (M_2+badly), Cp tag ?

Bridgetのことばの前半を，Davyは，相手のことばを取り入れて，先ず確認する。「彼女は自分の管財人である弁護士の所へ行ったというのですね。」しかもこの時Ohが先行することにより，情報がDavyにとって意外性を持つことを匂わせる。Davyの確認はこの場合，単純にBridgetのことばを繰り返すことによって行なわれる。次にBridgetのことばの後半をDavyはCp付加疑問文で確認する。「何かを知りたかったということですか。」この二回の確認の各々の後で，Davyはさらに新しい情報を引き出している。一回目はlawyersの名前，

二回目はsomethingを特定化する，how much money she'd gotである。相手のことばを利用しつつ，巧みに自分に有利な情報を加算していく会話の例である。

Cp付加疑問文は基本的にMの内容確認をふまえて，理解はできたものの，それは，おかしい，まさか，とんでもない等の感情を併せ表現する場合がある。意外性から反論，疑問を投げかけるところまでいくこともある。この機能を示す一つのマーカーとして，Cp付加疑問文にはOh, So等の，話者の感情を表わす語が先行することが多い。このOh, So等は，いわば相手のことばへの消極的解釈の踏切板フレーズとしての働きをする。そして，さらに，相手にM否定を期待するところまでいく。この場合後続発話が，Mを否定するような表現であるなら，話し手の期待通りであるが，もし肯定されるようなら，話し手による驚き，意外，憤りの感情表現が後続する場合も見られる。

5. おわりに

相手の発話Mを繰り返す場合，これをそのままMと繰り返したり，Mを多少言い換えたり，Mの一部を繰り返したり，さらにMの一部に情報を加算して繰り返し会話を発展させることもある。つまりM′の内容量は，M′＝M, M′≒M, M′＜M, M′＞Mと表わすことができる。無付加型の繰り返しの場合にはこの情報を加算して繰り返すことがよくみられるが，エコー疑問文，エコー感嘆文の時は相手のことばを問題にするわけであるから，加算の場合はみられない。つまりM′はMよりも内容量が少なくなる。ところがCp付加疑問文の場合はこれらとは用法が少し異なる。Cp付加疑問文は，先ず「あなたの今のことばを私はこう受けとめた（こう聞いた）がそれでいいのですね」と，相手のことばを確認する時に使用されるが，上記例文（14）の最後の下線部のように，話し手が相手のことばになりうると推測することばを，導入する際の形式としても使用される。つまり，「あなたの今までのことばや態度から，あなたの言いたいことばはこうであると私は推測する。これこれということでいいのですね。」という意味で，話者が相手の心の中を解釈し推測した結果を確かめる時に，Cp付加部が使用される。

エコー疑問文，エコー感嘆文，Cp付加疑問文はともに一種の繰り返し文と考えられるが，各々形式的に疑問符，感嘆符，Cp付加疑問が後続し，発話者の意図が明示化されており，この点でいわば有標の繰り返し文ということになるであろう。ところが無付加型の繰り返し文の場合は，発話者の意図が明示化されないが故に，聞き手の解釈は広範囲にわたるといえよう。

ここでもう一度簡単にまとめてみると，なにもつかない場合の繰り返しは基本的には，会話への参加の意志表示になり，相手のMを受けとり，これを了解したことを伝える。そしてその内容に自分も共感することを伝える。そしてこの点から始まって，繰り返しに情報を加算し

つつ，会話を展開させる。この繰り返されることばが会話のキーワードとなって話の一貫性も生まれてくる。また自分の発話内で繰り返しをすることにより，相手にMの重要性を伝え，強調の効果をもたらす。

エコー疑問文は，「Mといったか?」「Mということばを使ったか?」等の，単なる発話内容の確認作業のために使われることはまれであり，むしろ内容に懐疑を示したり，ことばそのものを問題にすることが多い。極端な場合，Mを否定してほしいというところまで要求する。応答は通常発話者の発話の動機を考慮に入れて行なわれることが多い。

エコー感嘆文は，Mに対する自分の感情を伝えるわけであるから，相手の対応を期待する気持ちは弱い。しかしわざわざ相手のことばを問題にするという点から考えれば，「Mだなんて，とんでもない」と，このMを否定する感情が反映されることが多い。

Cp付加疑問文は基本的には，相手の言った，言おうとしている内容を確認する時に使用されるが，その先行節に対する話し手の感情，例えば，反論，疑問等を併せ表現する。従ってこのCp付加疑問文にはOh, So等の，話者の感情を表わす語が先行することが多い。さらに相手に，相手のことば（時には，なりうることば）の否定を期待するところまでいくこともある。

引用作品

AAI　Lewis Carroll. *Alice's Adventures in Wonderland and Through the Looking-Glass.* Oxford University Press.

ABH　Agatha Christie, *At Bertram's Hotel.* Pocket Books.

MFL　Alan Jay Lerner, *My Fair Lady.* Penguin Books.

TMW　William Gibson, *The Miracle Worker.* 朝日出版社.

OGP　New Current Screen English Series. *On Golden Pond.* nci.

参考文献

Chafe, Wallace L. 1970. *Meaning and the Structure of Language.* Chicago: The University of Chicago Press.

Cole, P. (ed.). 1978. *Syntax and Semantics. 9: Pragmatics.* New York: Academic Press.

福地肇. 1985.『談話の構造』. 大修館書店.

Halliday, M. A. K. & Ruqaiya Hasan. 1976. *Cohesion in English.* London: Longman Group Ltd.

Hooper, Joan B. 1975. 'On Assertive Predicates' in Kimball, John P. (ed.). 1975. 91－124.

Hudson, R. A. 1975. 'The Meaning of Questions'. *Lg.* 51. 1. 1－31.

稲木昭子. 1990.「極性一致の付加疑問文—談話の流れの中で」『言語研究』97. 73－94. 日本言語学会.

今井邦彦，中島平三. 1978.『現代の英文法（Ⅱ）』. 研究社出版.

神尾昭雄. 1990.『情報のなわ張り理論』. 大修館書店.

Kimball, John P. (ed.). 1975. *Syntax and Semantics. 4.* New York: Academic Press.

Leech, G. N. 1983. *Principles of Pragmatics.* London: Longman Group Ltd.

Leech, G. N. & J. Svartvik. 1975. *A Communicative Grammar of English.* London: Longman

Group Ltd.
牧野成一. 1980.『くりかえしの文法』. 大修館書店.
毛利可信. 1980.『英語の語用論』. 大修館書店.
Nässlin, S. 1984. *The English Tag Question.* Stockholm : Almqvist & Wiksell International.
太田朗. 1980.『否定の意味』. 大修館書店.
Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech & J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language.* London : Longman Group Ltd.
Sinclair, J. McH. 1972. *A Course in Spoken English : Grammar.* Oxford : Oxford University Press.
Swan, Michael. 1980. *Practical English Usage.* Oxford : Oxford University Press.
田窪行則. 1990.「対話における聞き手領域の役割について」.『認知科学の発展』3. 67－84. 日本認知科学会.
Tannen, Deborah. 1984. *Conversational Style.* New Jersey : Ablex Publishing Corp.
_____. 1989. *Talking Voices.* Cambridge : Cambridge University Press.